

団塊のカタログ

第13号

平成10年7月

トシタロー・グラフィティ

力道山は国と共に歩いた

不滅のヒーロー-力道山

昭和25年に大関を目前にしながら突如引退した^{りきどうざん}**力道山**が、28年「**日本プロレスリング協会**」を設立した。

☆

お国の為・天皇陛下のおん為と押し付けられた耐乏生活、やっと戦争が終わったと思ったら今度は一億総懺悔、それでもGHQ（連合軍総司令部）の指導で憲法も制定され、民主国家としての体制は確立しつつあった。

戦争に善いも悪いもない。正義が勝者のものであるのは納得できるが、敗者だっ^{アメリカ}てそうそう反省しているフリもしてられない。

「世の中が変わろうとしていた。ボクらは変っていた。だから、ウケたんだ。」そんなビートルズ語録にもある通り、世の中が変わろうとしている時には伝統的なものより一味違った目新しさを求めるものである。

ジャズやブギが町に流れ、戦前・戦中に製作された洋画の名作が改めて公開され、黒沢明もカンヌでグランプリを取ったりした。

プロ・スポーツの世界では相撲やプロ野球も再開され、ボクシングの世界チャンピオン（白井義男）も誕生したが、国民の熱狂を呼ぶという程のものでもなかった。

スポーツの原点は格闘、早い話がケンカだ

から、憎い敵をコテンパンにやっつけてこそ観客も納得しようというもので、日本人同士だと対戦相手を心底憎めないし、チャンプもすぐ負けちゃった時代背景の中で、国民だれもがスカッとさわやかなスポーツとニュー・ヒーローの登場を待望んでいたのである。

折しも朝鮮特需で日本経済も立ち直りつつあったし、前の年の27年にはGHQのあった日比谷の第一生命ビルも返還され、そろそろ一人歩きしたいなと思っていた矢先に**力道山**がさっそうと登場した。

☆

「本日のメイン・イベント、61分三本勝負青コーナー、350パウンドー、**ジェス・オルテガー**」などと紹介されても客席はシーンと静まり返っている。（舞台は後楽園ジム）

「赤コーナー、250パウンドー、**リキードザーン**！」とアナウンスされ、**力道山**がガウンをパーッと脱ぎ捨てるやいなや「待ちました！」の聲がかかり、場内割れんばかりの拍手がドーンとわく。試合開始直後から執拗に反則攻撃を繰り返す外人レスラー、これに戦後の国民を象徴するがごとくジッと耐える、黒のタイツもりりしい**力道山**。

「外人はきたないねえ。正々堂々とやれないのかねえ」「**力道**、怒ればいいんだよ」そんな声がそここで聞こえてくるとそろそろ中盤、やがてグーッと盛り上がる。

えんどう
こうさち あずまふじ とよのぼり
タッグ・マッチの相棒には柔道出身の遠藤幸吉や相撲出身の東富士・豊登などがいたが大體終盤近くになるとリング外におとされ、孤立無援の力道山に極悪外人コンビが2人がかりで襲いかかる。どうするんだ、**力道**!!

「**力道**、そろそろ反撃しないとまずいですね、解説の伊集院浩さん」「そうですね。このままではいけませんよ」こんなやりとりがあったりすると8時45分頃の「水戸黄門」でそろそろ助さんの印籠の出番だ。

「決まったあ! 伝家の宝刀空手チョップ! 水平打ちが喉元にグサリィ!!」アナウンサーが絶叫すれば、今まで非道の限りを尽くしてきた外人レスラーはケツからぶっ倒れる。

(鬼畜米英もこうなる筈だったんだがな…)

のしかかる**力道**、サーと回り込むレフェリー沖識名。カウントが入る。**ワン・ツー**、右の肩が上がる。行け!**力道**! 再び**ワン・ツー**、今度は決まったァー、**スリー**!!

☆

こんなプロレスの人気を決定づけたのは、29年2月に蔵前国技館で行われた**シャーフ兄弟**とのタッグマッチである。

柔道の**木村政彦**と組んで、**ベンとマイク**の外人兄弟組を迎え撃ったこの3日間のシリーズを日本テレビは連日中継、盛り場や駅前の街頭テレビや電気屋さんの前は文字通り黒山の人だかりでにぎわった。

9月には東京都体育館で遠藤幸吉とタッグを組み、**シュナーベル・ニューマン**組を破り太平洋岸選手権を獲得する。このシリーズ、厚生省(!)と毎日新聞社が後援し、NHK(!)と日本テレビが実況中継したというのだから、今のプロレスとは比較にならない。

12月、今度はかつてコンビを組んだ**木村政彦**と日本選手権を争い、大観衆15,000人が見つめる中、15分49秒ドクター・ストップで破り、初代日本チャンピオンの座についた。

力道山を語る上でテレビは欠かせない。

相撲・野球・ボクシングなどと同様に、この頃は一般紙にも報道されていたのだが、勝った負けたの結果だけではどうしてもナマの興奮は伝わってこない。

一方で、国技館や後樂園ジムとか〇〇市民会館などでは収容人員に限界がある。

だから群がる街頭テレビ、いずれは持ちたい我が家に1台……というわけでテレビの普及にプロレスが、いや**力道山**が大いに貢献したというわけである。30年には「力道山物語・怒濤の男」の題名で日活が映画化、33年には宿敵**ルー・デース**を破りインターナショナル選手権を獲得、この頃が絶頂期であった。

☆

昭和38年、高級クラブで飲んでいるところを住吉会系のチンピラと「足を踏んだ」「踏んでない」のつまらないことからケンカとなり、登山ナイフで腹を刺され、入院先で腸閉塞症を併発、40才の若さで亡くなった。

この事件にしても、暴力団と興行の利権をめぐるのもつれとも言われたし、25年には遠洋漁船「力道山丸」保険金詐欺で共謀の容疑をかけられたりもしている。

また、いったん廃業した相撲界に未練がましかったりと、どうやらヒーローにふさわしい人格・人徳は備わっていなかったのが真実のようだ。(朝鮮国籍は問題外)

プライバシーとビジネスの評価、必ずしも正比例しないからこそ面白いのだ。(中原誠さん、自業自得とはいえ相手が悪かったね)

シャーフ兄弟を始めとして、動くアルプス(人間山脈)**フリモ・カルネラ**、ヒゲのメキシコ人**ジェス・オルテガ**、インドの正統派**タラ・シン**、野獣**キングコング**、怪力**グレート・アントニオ**、頭突き**ヘッドバット**の**ボボ・フラジル**、白髪鬼**フレッド・フラッシー**、4の字固めの魔王**デストロイヤー**、そして鉄人**ルー・デース**

との息詰まる熱戦。勇気と感動を与えてくれた**力道山**。ワシラ団塊の世代のヒーローとしての地位は不滅である。

風と共に去りぬ

力道山の日本プロレス設立の前年（27年）に封切られたのが**風と共に去りぬ**で、マーガレット・ミッチェル不朽の名作を映画化したこれまた不朽の名画である。

☆

場内が暗くなり、勇壮な**タラ**のテーマが客席せましとばかりにステレオ音響で鳴り響いて映画は始まる。

オープニングにでっかい古木が映され、舞台の背景が南北戦争の直前であること、そして風とともに去りつつあるのが古い制度であることを画面の活字が説明してくれる。

と思う間もなく、画面はいきなり明るくなって、アメリカ南部**アトランタ**州の**タラ**（実際には存在しない）を映し出し、農場で黒人たちが働いている情景となる。

「おーい、休憩だぞう」とその中の一人が号令をかけるが、隣にいる親方らしいオッサンが「オイ余計なことするんじゃねー。それはオラの仕事だ」とクレームをつける。

で、あらためて「おーい、メシにすべー」となる。どこにでもこだわる奴はいるものだと笑わせてくれるのだが、客席はシーンとしている。「うるせえなー」と言わんばかりに他の観客にジロッとニラまれるが、こちらも慣れているのでシカトする。

☆

やがて舞台は南部貴族たちが集まっているパーティー会場「十二本樫の木荘」へ。

スカレット・オハラは幼なじみの**アシュレー・ウィルクス**を勝手に愛している。

インテリっぽくてどこか影のあるこのやさ

男、**ビビアン・リー**演ずる極め付きの美女の求愛に振り向こうともしないどころか逆にフィアンセの**メラニー**を紹介する始末。

「よろしく頼む」などと言われ、渋々「喜んで」と答えてしまう**スカレット**。

その前のシーンでは「北軍と戦争だ」「リンカーンをブッとばせ」などと騒ぎたてる男どもをフツてきたというのに。くやしい。

頭にきた**スカレット**、そこらにあった食器を壁に投げ付けて悔しがる。ところが、だれもいないと思ったその部屋には一人の男が長椅子に寝そべっていたのだ。

これが**レット・バトラー**船長（**クラーク・ゲーブル**）で、ヒューと口笛を吹き「もう戦争が始まったのか？」と冗談を言う。

この時、口元を皮肉たっぷりにゆがめるのだが、これが実にカッコ良くて鏡の前で真似してみたことがある。

そんなヤロウ共は結構多いと思うが、まあ大体ただ顔が引きつるだけである。

☆

パーティーが盛り上がる中「戦争が始まったぞ！」のニュースが舞い込んでくる。

アシュレーにふられて茫然自失状態の**スカレット**は取り巻きの一人と成り行きで婚約してしまう。これがなんと**メラニー**の兄キ、ということは**アシュレー**と親戚になれるわけだからしっかりしている。

ところがこの男、戦場に出かけて間もなくハシカで死んでしまうのだから情けない。

やがて戦線は奴隷解放論の**リンカーン**率いる北軍に有利に展開し、南部の**アトランタ**帯は傷付いた兵士たちで一杯になる。

スカレットや**メラニー**はそんな兵士の看護にあたるのだが、このあたりの悲惨さには思わず息を吞まずにはいられない。

病院に道端に傷病兵があふれるシーンがこれでもかとばかりに映し出された後、カメラ

は徐々に引いてゆき、やがて町全体が現れる
とそこには南部同盟旗が風に揺らめいていて
奴隷制度存続を主張する南軍の劣勢を観客に
教えてくれる。

———— ☆ ————

青空の下の広い農場と華やかなパーティー
から始まった画面は、南軍の敗色が濃くなっ
てゆくにつれだんだん暗くなってゆくが、さ
すがはハリウッド、ユーモアも忘れない。

アシュレーが休暇で一時帰省するとの手紙
が届く。喜ぶ**メラニー**と**スカーレット**。

続いて、コーッコーッコーと逃げまどうニ
ワトリを黒人の使用人が追いかけるシーンに
なる。やがて食卓の場面がいきなり登場し、
そこには観客の期待を裏切らずにトリの丸焼
きがキッチリ大写しされる。

大きくわけて、笑いには「予期せぬ」笑いと
「期待通り」の笑いの二種類ある。

戦場から死亡通知がくれば、普通は戦死だ
と思う。ハシカだとはだれも思わない。

これが「予期せぬ」笑いだ。

いきなりニワトリが出てくるが、ハハハこ
は丸焼きにされるなど想像がつく。

「期待通り」になる。

寅さんシリーズは大体このパターンだ。

おいちゃんとタコ社長が寅さんの悪口を言
っている。そろそろ出てくるなどと思う間もな
く……この期待を裏切らないからこそ丈夫で
長持ちしてきたわけだが、そこここに「予期
せぬ」笑いも登場する。

ライオンのマークでおなじみ、MGMの永
遠の財産ともいわれるこの超名作、さりげな
くユーモアの罫が仕掛けられていて、これに
気が付かないと楽しみは半減する。^{なみだ}（悲劇は
人の感情に、^{わらい}喜劇は人の理性に訴えるのだ）

———— ☆ ————

この**風と共に去りぬ**は**南北戦争**を背景に、
スカーレットがひ弱な**アシュレー**とたくまし

い**バトラー**との間を行ったり来たりするラブ
・ストーリーとして展開して行く。

気が強い**スカーレット**と心優しい**メラニー**
の対称的な女性二人の対比も巧みだし、**アト
ランタ**の町が火事でくずれおちるスペクタクル
・シーンもすごいが、それは表面上のことで
実際は**スカーレット**のみが主役で、時代背
景を含め残りはすべて（**バトラー**さえも）脇
役と言ってもさしつかえない。

一・二部に分かれていて、**スカーレット**が
一人の女として人間として目覚め、たくまし
く生きる決心をするところでどちらもエンド
・マークが出てくる。

第一部は南軍が北軍に敗れるところで、第
二部は**スカーレット**が愛児**ボニー**を失い**バト
ラー**が去って行くところで終わるが、それぞ
れのラスト・シーンが素晴らしい。

「私は負けない。もう、家族を飢えさせな
い。神もごらんあれ、必要なら他人も殺しま
す」と第一部が結べば、「そうよ、お父様も
言ってたわ。生まれた土地が全てよ。私には
タラがある。Tomorrow is another day」
で第二部が終る。

いずれも背景にはオープニングと同じ、で
っかい古木が画面一杯に広がっている。

最後のセリフの英語だが、あまりにも有名
なわりには訳がいい加減で「明日は明日よ」
「明日はちがう日よ」「なんとかなるわ」な
どはいい方で、ひどいのになると「明日は明
日の風が吹く」とくる。

敵性映画だというので戦後7年たってから
やっと封切られたのだが、この映画が戦前に
封切られたらアメリカと戦争しようなどとは
決して思わなかったろう。

「欲しがりません勝つまでは」とはスケール
が違いすぎる。ワシが初めて劇場で見た昭和
46年ですらそう思った位だから、その30年
前（昭和16年）ならなおさらだ。